

---

# 紅い瞳と竜

みのり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紅い瞳と竜

### 【Nコード】

N6617J

### 【作者名】

みのり

### 【あらすじ】

目の前には、大きな卵。それは、竜の卵。ソレを育てるのは、紅い瞳と忌まれる俺。竜と人が共存する国、ニルビア国。100年に1度、生まれる竜の卵。神と竜と人間と。今、物語が始まる・・・。基本、竜育児放棄だったりする。連載処女作です。不定期です。がストーリー、が閑話的なカンジです。只今、超亀更新中・・・

## プロローグ

竜と人が共存する国、ニルビア国。

昔は、赤い瞳の魔物に支配されていた国だった。

だが、どこからか飛んできた竜が滅亡寸前の国を守った。

以後、その国は、竜が国を守り、人が竜を守った。 竜の守護を受けたのだ。 人も竜を守るのを条件にして。

竜は、子孫を残すため、卵を産んだ。 竜は、その卵を人に任せた。

「我の子をそだてるがよい。 育てればこの国には竜の守護を。 だが、それができなければ我がこの国を滅ぼそう。」

育て方や育てた人のココロで竜も変わる。 さあ、契約しよう。

人が破るか、竜がやぶるか……。」

ギリギリの契約。 破るためにある約束。 いや、それは『賭け』

ともいう。

いつ破るか、誰が破るか。 竜か、人か。

ただ、それだけが竜と人とのつながり。

その契約を知るのは、古く昔の王だけだ。 それを知る者は、もういない。

否、人には（……）。

知っているのは、紅い瞳の魔物と竜のことだけ。 賭けのことなど知らないのだ。

さあ、また新しい卵が生まれる。今度は、誰に託そうか？  
そろそろ、飽きた。ギリギリで、予想ができない賭けにしよう。

さあ、誰？ 誰？

見つけた。 見つけた。

この男にしよう。 紅い瞳をもったこの男にしよう。

面白くなりそうだ。

これは、竜と赤い瞳の男の物語。

## 紅い瞳の男 ?

市場に黒い影。

フードを深くかぶった男。 その隣には、金髪の派手めな男。  
金髪の男が口を開いた。

「なあ、今日は何を買いに来たんだ？」

「・・・麦。と野菜と調味料。あと服。」

フードをかぶった男は、簡潔に答えた。

金髪の男は、ハアと小さくため息をついた。

「あいかわらずだなあ・・・。せつかく久しぶりに会って、外に出たのに。」

「別に久しぶりじゃない。1週間会ってないだけだし、外には出たいと思って出たわけじゃない。」

またまた、簡潔に。

この男の名は、ルシファーユーリ。

その隣の男が、ロイヤンバー。友人といってもこの男の素性も知らない浅い仲。

「寂しい、とか感じないのかよ？せつかく唯一の友人が遊びに来てやったのにさ。」

「べつに。とつとといくぞ。」

二人は、市場へ向かっていった。

「これとこれとこれをたのむ。」

ルシファアは、店で野菜を買っていた。ちなみに、ロイは広場に待たせてある。うるさいからな。

「はい、毎度。」

ペコリ、と頭を下げ広場に向かう。道には、人であふれかえっている。ぶつからないように避けながら歩いていく。フワア、と人々の間に風が吹く。

(少し風が強いが、いい天気だな……。本当に久しぶりに外へ出た。2週間ぶりか?)

そう、ルシファアはほとんど外へは出ない。どうしてか？ それは……

広場の方が騒がしい。もしかして・・・、という悪い考えが頭をよぎる。

広場へ着いた。やはり、なにかあったようだ。否、現在進行形で、だ。

ソレを見たとき、ハアとため息がでた。

だから、嫌だったのだ。この男と外へ出るのは。また、見られる(・・・)可能性が増えたじゃないか。おれは、イライラしながら

「ロイツッ!!!」

でかい声で騒ぎの原因となっている男の名を呼んだ。

## 赤い瞳の男？

呼ばれた男は、振り向いた。 いや、ロイだけではなく他にも数人。

「おお〜！！ ナイスタイミングジャン！ さすが、オレの友人！」  
・・・のんきだな。 今にも殴られそうなヤツが。 コツコツ、と歩み寄る。

「今日は、助けないからな。 俺は、帰る。 がんばれよ。」

「なツ！？ 助けてくれねーのかよ！？ あてにしてたんだぞ！」

問答無用、と来た道に戻ろうとする・・・が。

「おい！！ あんたもこの男の仲間かい？ なら、あんたも殴んなきゃなあ？」

「顔なんか、隠して何者だ？ ま、これからやられるのには変わりねーけどなあ。」

ぎゃははは、と下品な声を上げる男供。 やはり、巻き込まれた。

ロイは、ニヤニヤと笑っている。

（お前のせいだというのに！ そろそろ、殴ってもいいか？ この男・・・。）

いい加減、飽きた。と思う。いつも、いつもそうなのだ。ロイがふっかけられたケンカに巻き込まれる。ていうか、いつもふっかけられているのはなぜだ？ という疑問はいつになっても解決されない。

「おい！ 前見ねーとアブねーぞ！！」

忠告、ではない。殴る寸前で言われても意味がないからな。

眼前に迫るソレをさっと横に避ける。避けられたのに驚いていたが、立て続けに殴ってくる。

ふむ。今回のやつは、けっこう強いやつらしい。ちら、とロイをみるとあいつも戦っている。一人でも勝てるくせにいつも俺に振ってくるのだ。

おれは、殴り返した。ドゴツと鈍い音がした。

「グフツ！！」

おとこが倒れる。

「なんだ！？ こいつら、強えーじゃねえか！？ 何者だ！？ ガッ！」

こいつも殴っておこつ。ロイも殴って蹴って、とりあえず終わり。といっても意識は残しであるから、とりあえずだ。

「ぐう……！ 本当にダレだ！？ 顔を見せる！」

「……見せているだろう。こいつが。だから、仕返しするならこいつにしる。俺に来るなら筋力がいだ。」

ロイを指差す。ロイは、苦笑いだ。

「おいおい……。……つと!!!!」

急に強い風が吹いた。フードがとれる。しまった、と思ったが遅かった。

顔が日にさらされる。 瞑っていた目を開く。 光が目痛い。

「な……。つ!? 紅瞳<sup>あかめ</sup>!?!」

きやああああああ、と悲鳴も上がる。 本当にしまった。 フードを被りなおし、走って立ち去る。 ロイも後ろから着いてくる。

やはり、外に出るのではなかった。と思う。 やはり、この瞳は陽に晒すものではない。

男たちは、騒ぎを残したままそこを立ち去った。

紅は、災いの色。 恐怖と非難の色。 男は、ソレを持っていたが

ため、親に捨てられ、蔑まれた。

愛されなかった。愛されたかった。だが、それは叶わなかった。

だが、この男にも愛される瞬間が来たのだ。あとすこし、あとすこし……。

赤い瞳の男 ? (後書き)

誤字訂正しました。

## 男と卵

家に着いた。家といつても必要最低限のものと数多くの本しか置いていない。

ガチャガチャ、と鍵を開け、ドアを開ける。俺の後ろには、ロイ。

「・・・おい、何でいる？」

苛立ちを抑えず、低い声音で言う。

「ああ・・・。怒んなって！ すまなかつたっ！！」

パンつと目の前で手を合わせ、拝むようなしぐさをする。

まあ、これで許すとは俺も甘い。といっても、いろいろと手伝わしてもらおうが。

「そういう意味じゃない。なぜ、俺の家に来たのかという意味だ。」

「それはウソだろ！ 絶対怒っていたぞ。ま、いいか・・・。

まあ、ちよつとね。だが、お前の家って意外とでかいんだな！

ちよつと、意外だぜ。金持ちなのな。」

そつえば、家に来たのは初めてだったか・・・。だが、ロイの方が金持ちだろうな。服は、庶民のものと変わらないが、生地が高級品だ。

「おれは、金持ちじゃない。早く中に入るぞ。お前も手伝え。」

「へえ、入れてくれるんだな。で、何を？」

だって、入れないと言ってもお前は勝手に入ってくるだろう。とは、言わない。

「昼飯の手伝いだ。俺を巻き込んだ罰だな。」

「は！？ まだ、怒ってんの！？」

「嫌そうな顔だな。それで、帳消しにしてやるといっているんだ。」

「ハア……。お前って意外とケチ」

「なんか言ったか？」

「いいえ……。」

途中で話をさえぎってやる。

入り口で話していたので、歩を進めて中央のテーブルへ荷物を置こうとしたが……。

「？」

……大きな卵。普通の卵の何個分だ？と思わず考えてしまった。

「ん？ どうしたんだ？？ ……卵。」

ロイも卵を見つけたのか、ボソツとつぶやいた。

「……やはりな……」

「ん？ 何か言ったか？」

今度は、怒りを込めて言ったのではなく、単に小さすぎて聞こえなかったのだ。

「いや？ なんでもない。だが、でかいな。」

「……。 どうでもいいな。 とつとつと、昼飯を作るぞ。」

別にこんなものに興味などない。今は、昼飯が優先だ。

「は！？ 興味ないわけ！？ ダレのものとか、何の卵とか！？」

……なんの卵か……。ふと、思った。

「……。 この卵、食べるのか？」

「……！？ くっ」

ロイは、呆然とした顔をした。

「くっ？」

「食うんじゃね————ッッ————!!」  
「————!!」  
アホかッ——

男と卵（後書き）

誤字訂正しました。

## 竜の卵と竜使い

「こんな大切な（・・・）モンを食おうとすんな！！」

ということで、ひとしきりキレたところで、口を開く。

「で、何のたまごなんだ？」

ロイは、「大切なモン」と言った。　ということは、何の卵が知っているということだ。

ギクツという風からだを揺らした。

なにか、まずいことでもあるのか？

ロイは何か思案してから、口を開いた。

「・・・確信はないんだけどな。　いや、最近こんな話をきいたからな・・・。」

ロイによると、　昨日ぐらいに竜の卵が生まれたらしく、それがだれかに届いた、という噂を聞いたのだそうだ。

おれは、「竜？」と首をひねる。

「なんだ？　知らないのか？　この国のやつらならみんな知ってる話だぜ？　ほんとに外界そとには、何にも興味がないやつだな・・・。」

よかった・・・。　勝手に勘違いしてくれて・・・、と思う。

俺には、それを教えてくれる人間がいなかった（・・・）のだ。

「じゃあ、教えてやるよ。」とロイは口を開く。

「この国は、竜と共存している国だとは知っているだろ?」

ああ、と返事を返す。だが、それはどこかの御伽噺だと思っ  
たが。

「竜は王宮に住んでいてな。100年に一度、卵を産むらしい。  
ソレを国民に与えて、育てらせるんだ。まあ、人を選ぶのも

竜だな。ま、そんで今年もその年が来たってことだ。選ばれ  
たら、王宮で贅沢三昧、ダレでも頭を下げるし、いい事だらけ

だな。竜の子供のお守りつきだけど。選ばれた人間を 竜使い  
(ドラゴンマスター)というんだ。」

ふーん、初めて知った。そんなことがあるのか……。ま、ど  
うでもいいな。

「じゃあ。これを隣の隣の隣のまた隣の家に持っていくぞ。」

「は? なんで?」

本当に分からない、と言う顔をされる。物分りの悪いヤツだな。  
。。。

「持って行って、これを押し付けるんだ。ちなみになんで隣の隣

の隣のまた隣かというと、いつも鍵が開きっぱなしだからだ。

あと、昼間はいつも留守だ。」

物分りが悪いやつに聞かれる前に答えを言っただけだ。

「……なんで、そんなことを知っているのかは聞かないでおこう。  
……お前、意外と怖いな。」

「？ 知っているのは、普通じゃないか。第一、あの家はかぎをつけていないからな。」

「もういい。で、なんで押し付けにいくんだ？」

急に場の雰囲気が変わる。ロイの空色の瞳に俺が映る。

「俺なんかがもらっても意味がない。そんなものに興味なんてない。それに、この眼のこともある。おれは、やらないんじゃない」

。できない（……）んだ。」

ロイは、この眼の事を知っている。詳しい（……）事は、教えてはいないが『紅い瞳』という事は知っているのだ。

「……。」

沈黙がつづく。ロイはしゃべらない。その代わりに俺に視線を向ける。俺もロイにむける。

……男同士が見つめあう、気持ち悪い時間が続いた。

「はあ、何がよくて、男を見つめにゃならんのだ……。」

それは、コッチの台詞だ。

俺もため息をついて、卵を持ち上げた。

「とりあえず、もっていくぞ。本当に俺ではまずい。」

ロイは、ふいに窓から外を覗いて歩き出した。

ドアノブを掴んで、ドアをあける。

「俺は、帰るよ。ソレは、好きにしたらいいと思うぜ。……  
そんなことをしても無駄だろうけどな。」

「？ それは、どういう……。」

言い終える前にパタン、とドアが閉まる。俺は、頭に「？」を浮かべて、卵を持ち直す。

意外と重いな……。と思っていたら、外で足音が聞こえた。

俺に客か？ だれだ？

コンコン、とノック音。勝手に扉が開いた。

おいおい、と思ったが何もいわない。急いで、フードを深くかぶり直す。

「竜の卵をお持ちですね。王宮まで来ていただきます。竜使  
い（ドラゴンマスター）。」

？がついていないということ、確信を持っているということだ。

ついさつき聞いた言葉を放ったそいつらの胸には、王直属の官吏の証の竜と人をあらわす紋章がついていた。

## 竜の卵と竜使い（後書き）

（・・・）が多いですね・・・。

初めまして。みのりです。

やっと、卵までいきましたっ

できるだけ、早く更新したいとおもいます。

ルシファアは天然入ってますね。ロイはつつこみ役。

二人とも何かしら秘密が・・・。気づいた人は、もういますか？

よろしければ、またこの駄文を読んでくださいな

感想など待ってます！

## 王宮と男

はあ、とため息をつく。

俺は、今王宮に向かっていている途中だ。

あの時・・・

---

「王宮まで来ていただきます。」

「なぜ？俺は、行かないぞ？」

俺は、まったく行く気がなかった。別に、卵なんてどうでもいいしな。

たとえ、王命令だろうといく気などない。

「王命令ですぞ。来なければ、分かっているらっしゃるのか？」

「だから、行かないといっている。その耳は飾りか？」

相手は、呆然としている。

まあ、当たり前か。今まで、王命令を断った者はいないだろうか  
らな。

「・・・いえ、きて頂きます。」

その中で一番年老いていそうなヤツが騎士のようなヤツに目配せをした。

そいつが歩いてきて俺の腕を掴んだ。

・・・どうしようか。ここで、騒ぎを起こすのも嫌だし、またフードが取れると厄介になるか・・・。  
おとなしく行って、きっぱり断るとするか。

「分かった。行ってやる。とつとつ、行くぞ。」

バツとつでを振り払った。

わざと偉そうにしてやったが、相手は何も言わなかった。いや、我慢しているのか？俺が竜使い（ドラゴンマスター）かもしれないから。

俺は、卵を持って家を出た。

そして、今に至る。

ただいま、城の内部。

「もうそろそろでございます。まず、王様方に会っていただきます。顔見せと竜使いとしての契約などを行います。」

廊下をコツコツと音を響かせ渡っていく。

高そうな壁だな、とおもった。彫刻や絵の描かれた壁は税金の無駄遣いだと思った。

そして、足を止めた。視線の先には、大きな絵画だった。  
・・・これをどこかで見たことがある気がする。

「おや、どうなされました？ ああ、これは初代王のころからある  
歴史ある絵画でございまして・・・」

勝手に説明をしてくれるが、やはりどうでもいいな。まあ、気の  
せいだろう。

また、音を響かせ歩を進める。説明していたやつもあわててつい  
てきた。

ここを右に曲がって、まっすぐ行くと広間だ。

・・・。

「？」

なぜ、知っているのだ？ おかしい。

・・・また、あいつ（・・・）の記憶か？

「さあ、つきました。 竜使いがお着きになりました。」

思考をさえぎる。 でかい扉が開いた。

そこには、たくさんの官吏やら騎士やらがいた。

真ん中には、この国の王と王女たち。

王が口を開いた。

「おお、これが今代の竜使いか！ 顔を見せてはくれまいか。 ル  
シファー＝ユーリ殿。」

ほお、『これ』呼ばわりの上に名前まで把握済みか。

「……そのことについて申し上げたいことがございます。」

おれは、手っ取り早く用事を済ませるために用件を出すことにした。  
丁寧な言葉遣いを心がける。

「……そのこと、とは？」

分かっているくせに分からないフリをする。

「わかっていらっしゃるのでしょうか？ 竜使いのことについてです。」

「なにか不都合でもおありか。」

「いえ。不都合はございません。 ですが、私は竜使いを辞退させて  
いただきたいと思えます。」

ざわ、とどよめきが広がった。 「おろかな」 「気が狂ったか」  
などの非難の声も聞こえてくる。

それはそうか。竜使いを断る者などそうはいないだろうからな。

「それは、なぜだ？」

「私がそのような大役はこなせません。」

「そのようなことはない。 竜が直々に選ぶのだから。 古から続いて  
いるのだ。」

それに、なれば不自由な生活ができるのだぞ？」

不自由な生活、ね……。俺にはそんな生活は来ないだろうな。  
永遠に。

「いえ。その竜様もお間違えになったのでしょうか。私のようなものは竜使いの資格などございません。」

また、王が口を開きかけたその時。

「そんなわけねえだろ。いい加減あきらめろ。」

広間に響いた声。その声は……。

「……ロイ。」

「おいおい……。反応薄いなあ。もっと驚け。」

「なぜ、ここにいる？」

ロイが答える前に。

「ロイ王子だ。」「ロイ殿下だ。」「なぜここに？」「とまたどわめく声。

王子？ 王の息子……？ ロイが？

じっとロイを見つめた。確かに王と似ているような……。

「お父様、ただいま帰りました。」

ひざまずくロイ。

「おお、ご苦勞であった。．．．ロイも言ってやってくれまいか。この新しい竜使いに。お前のほうがよく知っておろう?」

「ええ．．．。　ということだ。あきらめろ。」

何があきらめろだ。　　というか、どうということだ?　なぜ、王が俺がロイと友人だということを知っている?

「おい、どうということだ。説明しろ。」

俺の声には怒りもまざっている。　外野から「なんとという口をきくのだ!」とこえもするが無視だ。

ロイは、手をあげてその声を静止させた。

「．．．やっぱ、お前は聡いな。ごまかすのはムリだろうな。．．．俺は、竜使いの見極めに行っていたんだ。この卵の親竜に言われてな。」

お前に近づいたのは、もともと、それが目的だった。」

まだ、ロイが話しているが聞こえない。

ドク、と心臓が高鳴った。　　そうか、また。　　また（．．．）裏切られたのだ。　　人に。　　人間に。

内なかから何か湧なき上がってくる感じがした。それに伴う声。

(俺をだせ！お前の代わりに！早く代われ！！)

意識内でグイッと引っ張られる感覚。

「お前のこと、信じてたんだがな……。俺のこと、騙してたんだな……。」

俺の意識が消えた。

最後に見えたロイのあわてた顔だった。

## 出会った過去（前書き）

ロイ視点です。

## 出会った過去

ロイ＝ナ＝アルフィーナ

王の第一王子。金の髪に空色の瞳。いまだに世間に知られていない顔。

それが俺だった。

俺がルシファーと出会ったのは、1ヶ月ほど前のこと。

竜に言われて ルシファー＝ユーリ という男を見に行った。否、監視を。

「その男は、おもしろいぞ。我が見に行きたいが、仕方がないのでな……。お前に任せる。」

竜はとても面白そうに言った。

城下に出た。とても久しぶりだった。まあ、町デビューってヤツ？

俺は、監視という仕事を忘れて遊びまくった。飲んで、食って思いつきり遊んだ。

ちょうど休みに行くこうと思ひ、広間に向かったときだった。広間からの男の怒声。

(何事だ？ ことらの治安はそんなに悪かったっけ？)

意外と勤勉なオレだから王の跡継ぎとしての仕事はしっかりしているつもりだった。

ここは、安全なところだったはずだが……？

広間の人ごみへ向かった。野次馬を押しつけて前に出た。そこには……。

数人の屈強そうな男とフードを被った男だった。

今にも殴りあいそうな雰囲気。

おいおい……。どういふ状況だよ……。仕方ない。  
オレはフード男の前に出た。

「はあ〜い、どうしたんですかあ？ 危ないですよ、こんなところでは。」

「貴様、だれだ！？ 邪魔すんじゃねえよ！一緒に殴られてえのか！？」

いや、それは遠慮するね。と後ろを振り向いたら、フード男は立ち去ろうとしていた。

「ハアツ！？ おいッ！？ どこにいくんだよッ！！」

その男は、ダァーッと走っていった。くそあ、無視の上に俺をおいて逃げやがった！！

おれもその男を追いかけていった。後ろからも追いかけてくるが、そっちはどうでもいい。

「まちやがれーーーーっ!!」

追いついたのは、だいぶ走った後だった。全力疾走は疲れる……。オレは肩で息をしていた。

「おい、てめえなあ……。」「

「……。すまなかった。」「

謝られた。意外といいやつなのか？

「いや、いいよ……。まだ追ってきているんじゃないか？」

オレは、周りを見回した。だが、そのような男は見当たらなかった。

「いないうちにとっと帰る。じゃあ、な。」「

「あつ、おい！ あんた、名前は？」

「……。ルシファー。ルシファー。ユーリだ。」「

「!!」

ルシファー。ユーリ。オレの探していた相手だ。これは、ラッキーだ。初日で会えるとは。

「へえ。オレは、ロイ……あ。」

本名は、マズイ。王子だとバレル。

「ロイ＝ア、アンバーだ。あのさ、これから一緒に遊ばないか？」

「……？なぜ？ すまないが、断らせてもらう。おれはあまり外が好きじゃないんだ。」

「そっか。じゃ、また今度話でもしようぜ！ オレは、あんたが気に入ったんだ。」

ちよつと無理やり感があるが、だいじょうぶだろう。それが、オレとルシファアの出会い。

それから、俺らは友達と言えるほどにもなっていたんだ。

---

オレは扉を開けた。  
中からは話が聞こえる。

「私には、そんな資格はありません。」

ルシファアの声だ。まだ、あんなことを言っているのか。断るのなんかに無理なのに。

「そんなわけねえだろ。あきらめろ。」

おれは、言葉を発した。友に真実を伝えるために。

だが、その事実がそんなにショックだったのか？

ルシファー、お前はオレを友だと思っていてくれたのか？

お前は、分かりにくいからな……。

すまなかった……。オレは、お前を裏切ったわけじゃないんだ。

あの時、オレはこういったんだ。

「きっかけは、こんなんだけどお前は、おれの友人だ。」って。

頼む、目を覚ましてくれ。

## 出会った過去（後書き）

ちよつと、痛いですね……。  
次もシリラス続くかもです。

ロイ君、ファイト！ ルシファー、がんばっ！

竜がでてこない……。

感想待ってます！

## 紅い瞳と深紅の瞳（前書き）

最初だけロイ視点です。  
分かりにくくてすみません。

『内は、周りには聞こえないルシファーの内での会話です。』

## 紅い瞳と深紅の瞳

ルシファーが身じろぎをした。急に倒れたときはビビったが、問題は無さそうでホツとした。

俺の言葉で傷ついてはいないだろうか？

「ルシファー！！おい！」

俺の声が広間に響く。それと一緒にざわざわと広がっていく音。ルシファーが起き上がった。

「・・・へえ、ここが王宮の広間ね。見た目若干違うが、無駄に金を使ってるのは変ってないな。あんたが王さん？初代とあんまり似てないのな。」

？ それは、どういう意味だ・・・？

「お前、ルシファーなのか？」

俺は思わずそう声を漏らした。

いつもは俺の前でもほとんど取らないのに、こんな所でルシファーがフードを取った。

長い前髪の間から瞳の色がいつもの紅から もっと、深く暗い深紅に変った気がした。

「な・・・ツ!? 紅瞳!? なぜ、このような者が竜に選ばれたのだ!？」

誰かが叫んだ。ロイは、ルシファーが紅瞳だということを報告していなかった。

だが、ロイは紅瞳がバレたことよりも別のことを考えていた。

(ルシファーとは、違う口調。これは、ルシファーなのか?)

ロイは、妙な違和感を感じていた。

「・・・ルシファーだ。何を言ってるんだ、えーと、ロイ?」「

『それは、俺の真似か? やめる。まったく似ていない。ロイの名前くらい覚えておけ!・・・というより、早く返せ。』

ルシファーの内なかでの会話。当然、他の人には聞こえない。

「まあ、待てつて。真似はやめてやるから。」

『俺と話すときは声に出すな!俺が独り言を言っているように聞こえるだろう』

内のルシファーは、声を張り上げた。だが、表うらのルシファーは十分聞こえるだろうソレを無視する。

表のルシファーの姿をした男は、ロイに向かって言葉を発した。

「なあなあ、この卵の親はどこだ?どっかにいるだろ。」

いることを知っているかのように話す。

「親？　なぜ、俺に？　父上に聞けばいいだろう」

一応、心配はするが頭の中は「？」がいつぱいだ。

「お前が一番知っているだろう？　えーと・・・、ロイ＝ナル・ファイナ？」

「！！　なぜ、その名を・・・！？　まさか、最初から知って・・・？」

ルシファーはにやり、と口を歪ませた。その顔は、俺の知っているルシファーじゃなかった。

まるで、別の人間が乗り移ったみたいではないか。

（なぜ、ルシファーが俺の本名を知っているんだ？　それに俺と竜の関りなんて知らないはずなのに・・・。）

これは、何かおかしい。ロイは、少し考えて頭の中である決断を下した。

とりあえず、今の問題はルシファーを竜使いにすることが先決だ。

「・・・親竜に会いたいのなら竜使いにならなきゃムリだな。」

「そうきたか・・・。ま、いいか。卵を貸せ。」

籠のようなものに入れられた卵を受け取るルシファー。　ソレを見つめるロイ。　広間のざわめきは、まだ消えない。

カツカツ、と歩き、ロイの腰にあった細い剣を抜いた。

「……！」

「ちょっと、貸せ。」

ルシファーは、その剣で己の腕を深く切った。ポタポタと垂れていく血は、卵に向かって落ちていった。ルシファーが口を開いた。

「我、ルシファー……ユーリの血において竜の契約を契る。」

それは、竜使いのなる為の契約の言葉。

卵から光が発せられ、あたり一面が暖かいクリーム色の光に包まれる。

人々の目が閉じられた。

ルシファーも少し遅れて瞳を閉じた。

『今日ここまででいいよ。竜使いのこと勝手にしてすまない。』

『……どういふ状況か理解ができないのだが。まあ、これもお前に必要なこと（……）なんだろう？』

『まあ、な。じゃ、また後でな。』

あたりが元の色に戻るころには、ルシファーはルシファーになっていた。

目の前には、ひび割れた卵があった。



## 紅い瞳と深紅の瞳（後書き）

だいぶ、間が空いちゃいました・・・。  
やっと、竜がでてきそうです。

誤字・脱字やおかしな点があったらいつててください！  
感想なども送ってくださいと励みになります

竜との出会い(前書き)

今回、少し短いです。

## 竜との出会い

ピキッ、パキッと卵の殻が割れる音。  
亀裂が卵に沿って入っていく。

そして……

コトン

上半分の殻が落ちた。中にいたのは……

「きゅあー……」「キュルルル？」

2匹の爬虫類、否 竜だった。

「……これが竜なのか？ まるで、でかいトカゲ……」

大人の猫ほどの大きさで、ツノやらなんやら竜っぽいものが。

竜はこちらをじっとみている。こちらからも見返す。

2匹の竜はまるで正反対だった。一匹は全体が光るように白く、あらゆる光を跳ね返しているような美しさだった。

だが、もう一匹は奥の奥まで染まっていそうな黒い体。

「おい、ルシファー！　なんでお前が竜使いの契約……、！！！」

ハッと我に返ったロイは、ルシファーに疑問をぶつけようとした……

・・・が、2匹の竜を見てまた、固まった。

「・・・な、なんで2匹も・・・!? こんな話、聞いたことないぞ!？」

「? 二匹じゃダメなのか？」

「ダメってというか、これはどうしたら・・・。 というか、ルシフアー忘れてたけどソレだいじょうぶか？」

ロイが指を指していった。 俺は、その先 腕を見た。

そこには、ぼたぼたと未だに血をあふれ続けさせる腕の傷があった。

「・・・ア。 忘れていたな・・・。」

気づいた途端にズキズキとした痛みが走る。 床には、あふれた血がつくった血溜まり。 床には、あふれた血

目の前が暗くなったり明るくなったりする。 頭がグラグラする。

これは、もしかしなくても・・・

貧血・・・?

俺は、また倒れた。

## 竜との出会い（後書き）

ルシファーは、しっかり者にみえて案外、鈍感です。

あまり、王宮の人たちが出てきませんね・・・。

まあ、新しい人物はまた、お楽しみで・・・。

## 男の決意

気がついたら、ベッドの上だった。

まだ、頭がクラクラする。

窓を見ると橙色の光が差し込んでいる。

「夕方が……。」

俺は、何時間眠っていたんだ？

ぼおっとしていると、ふと内側から“声”が聞こえた。

『よお！ やつと、起きたか。』

『……ああ。で、今度は何だ？ レイ』

こいつの名前はレイ。これは、俺がつけた名前だ。

「レッド アイ」の 頭と尾を取って レイ。

レイが言うには 『センスが無い』だそうだ。 だが、それでもいいとも言った。

それから、得体の知れないこいつの名前は レイ になった。

得体が知れなくても俺らは、昔から一緒にいたからそれなりに信頼しあっているというところだ。

『ん？ いや、お前がヒマそうだな、と思っとな。』

『そうか。……そういえば、お前はなんで竜のことを知ってたんだ？』

『そうきたか……。ま、ソレは言えねェんだ。ちょっとだけ言つと関係者つて所だ。』

「関係者……？」

思わず、つぶやいていた。

コンコン

そこで、ドアのノック音が聞こえた。

「……失礼いたします。あ、起きていらっしやっただけですね……」

俺を見たら、その目に怯えの色がみえた。

その女は、城に仕えるものの格好をしていた。

「あの、これをお持ちいたしました……。でわ、失礼いたします。」

女は持っていた大き目の籠を置き、足早に去っていった。立ち上がり、ふらつく体を壁で支え籠の中身を見た。

そこには、2匹の眠りについた竜がいた。

「こいつらをこれから俺が育てていくのか……。」

俺は、考えた。育てていけるのか、と。

『お前が育てたい風に育てればいいじゃねえか。』

『おれが・・・？』

『ああ。だが、あきらめるにはこいつらを捨てることになるぞ？  
もう、竜使いの契約はしてしまったからな。』

捨てる・・・か。俺は、どうしたらいいのだろう？

俺の親と同じように捨ててしまうのか？

「クルルル？」 「ガオオ？」

竜の目が開いた。俺を見つめる蒼い瞳と翠の瞳。俺を怯えない瞳  
だった。

俺は、思った。育ててみようか、と。

『なあ、名前決めてやれよ。』

「名前、か・・・。じゃあ、白い方がソウで黒いほうがスイでど  
うだ。」

「ぐるるる！（そう？ソウ！ソウ！）」 「きゅあぁー」・・・  
スイ」

俺は、どちらとも言んでいるように見える。 とうっか、言葉が分か  
った。

なぜ？

『竜と竜使いは契約で繋がっているからな。』

「へえ、そうなのか。よろしくな、ソウ、スイ」

竜たちは、コクンとうなづいた。

これから、また新しい生活が始まりそうだ。

『なあ。やっぱり、ネーミングセンス無<sup>ね</sup>えよな。お前。』

## 男の決意（後書き）

お分かりでしょうか？

スイとソウの名前の由来を。。。

ソウは『蒼』という字から。スイは『翠』という字から。

ネーミングセンス、無いですね……。

来週が期末テストでまた更新できないかもしれません。  
すみません……。

## 新たな・・・

あれから、一週間。生まれた竜2匹と王宮で一緒に暮らしている。帰ることは許されないらしい。

三食豪華な食事付き。文句は無いが、強いていうと、ヒマだ。

カチャカチャと皿を鳴らしながら目の前の料理を食べる。だが、そのスプーンにのっている量はとても少ない。じっとスプーンにのっているソレを見つめてため息をつく。

「スイ、ソウ。ほら。」

呼ぶと、口を大きく開けた。その中にさっきまで食べていた料理を半分ずつ流し込む。

ゴクン、とノドを鳴らして飲み込んだ。ソウは、クルルとノドを鳴らしてくつついてくる。スイもそれに習ってくつつく。これも、この一週間のおなじみの事だ。

意外と竜は、懐きやすいらしい。この一週間、べったりだ。といっても、性格は色と同じで正反対らしい。

ソウは、元気で基本的に走り回っている。遊びたい盛りらしい。スイは、物静かで人見知り。ロイにも、未だになつかない。

要らない物がなくなり、よし。と思ったが、その時、扉が開いた。

「おい。また、そいつらに食わしたのか。ちゃんと食わなきゃダメだろー。また、貧血起こすぞ。」

俺の目前にあったいすに座る。俺は、さっきまで料理があった皿を重ねていく。

スイが俺の後ろに隠れたが、いつものことなので気にしない。

「別に貧血は、俺のせいじゃない。れ・・・、傷のせいだ。」

「傷って・・・。お前がつけたんだろ。あ、そうだ。聞きたいことがあったんだ。」

レイのことを言いかけて危なかったが、言う前に気づき止めたことにホッとしたが。。。

「契約のとき、お前なんかおかしくなかったか？ 口調もなんか違っただし、俺の本名も知ってた。」

お前、俺のこと知ってたんだな。」

内心、ギクツとした。ここでバレるのはダメなのではないか？

「あ、ああ。他のは、多分気のせいだろうな。」

「そうかあ？ 絶対、おかしかったって。」

俺の内側でレイが晒っている。バカにしてるな。

まだ、俺を疑っている。

「くるる？（ねえ、何の話？）」「がおお（外、行ってみたい。）

「

外？」

思わず、スイのほうに顔を向けた。

こいつらは生後一週間にもかかわらず、俺の意識の中に言葉を飛ばしてくる。

「ん？なんだって？」

「いや、こいつらが外に行きたいって……。」

「ん？外かあ？ いや、竜が外に行くのは、ムリじゃねえか？ 城下のやつらにバレるぞ？」

「まあ、そうだろうな。残念だったな。」

俺は、スイの頭をなでてやる。鈍く光る鱗はつるつるして冷たい。スイは、気持ちよさそうに目を細める。

「ああ、でも、人間型になればいけるんじゃないかね？ 親竜は、人型になってたぞ？」

「人間型？」

その言葉を聞いた竜達は、すかさず口を開いた。

「きゃあー！(なれるよ！)」「くるるる(ルシファーみたいになれるよ。)」

と吠えてくるりと一回転した。すると。

ポワン

そんな音がして見てみると、二人の子供がいた。

「にんげん〜!!」 「ヒト、なった。お外、行こ。」

白髪・蒼眼と黒髪・翠眼の子供だ。もしかしなくても、ソウとス  
イか？

人間そっくりだが、瞳が細い。やはり、竜の人間型は少し違うの  
か。

というか、スイとソウってどっちもオスだったのか……。

「ルシファー、行こおっ!」

ソウが袖を引っ張る。と、その前に……。  
俺は、ソウをとまらせる。

「ちょっと、待て。 服を着ろ。」

そう、二人は裸だったのだ。

「ロイ、こいつらの服。」

「はいはい。」

新たなことを発見した日だった。



新たな・・・(後書き)

うう、裸にしちゃった・・・。

やっとテストが終わって、やっとかけたのに・・・。

次は、早めに描けるようにがんばります・・・。

初めてのおでかけ？

「なんか、へん〜」

「……ルシファーと一緒に？」

「ああ、一緒一緒。」

三者三様。上から ソウ スイ ロイ だ。  
竜にとって服は、着心地が悪いものらしい。

「で、行くのか？」

「ん？ 何、今頃。」

俺が言っているのは、外へ行くことについてだ。俺は外へはできれば行きたくない。

この瞳は、他の人にとっては災厄なのだ。たとえ、何も起こらなくても瞳を見れば災厄だ、魔物だとするさいのだ。まあ、もう慣れたが。それでも、自分からそのような言葉を受けに行くようなやつはいないだろう。俺だってそうなのだから。

「はいはい。駄々こねてないでいきますよお〜。はい、俺についてきてえ。」

何キヤラだ。

だれも、何もわない。

「……何か言えよ。俺、悲しいやつジャン……」

「ルシ、行く・・・。」

「行くっっ!」

もつと、暗いオーラが出たロイを放ほつておいて手を取られ、引ひつ張はられる。

まだ迷っていた俺は、抵抗しようとしたが・・・やめた。こいつらの目を見ていたら、

キラキラ

キラキラ

キラキラ

輝きらきがとまらない。これは、止められないだろうな・・・、とあきらめた。

ロイも立ち上がり、椅子にかけてあったフード付コートを持ってきた。

「ホレ。要いるだろ?」

「ああ。よくわかっているじゃないか。」

「ふ、伊達におまえの親友やってないぜ」

「……自称、な。」

「……。それ、本気で傷つくぜ……。」

ロイをいじめながらフードをいつものように被る。  
準備OKだ。

俺らは、部屋を出た。

ロイ、ソウ、スイを連れて俺は中央広場に来ていた。  
目的も無くうろついているという感じだ。

「なあ、外に出たのはいいがどこに行く？ 子供の遊び場なんて知らねえぞ」

「安心しろ。俺も知らない。」

「おい！ じゃあ、どうすんだよ……。」

ハア、とため息をしたロイを横目で見て次にスイとソウを見た。

「おまえら、どこに行きたい？」

「ここは、本人たちに聞くのが一番だ。」

「いろんなとこーっ！！ いっぱい見たい」

「ルシと一緒にならどこでもいい。」

「そうか。じゃあ、ロイ後は頼んだ」

「は！？なんでオレなんだよ。」

「決まっている。俺も知らないからだ。」

俺の家は、東の端のほう。いつも買い物に行くのも東の小さな市場だ。

それにくらべて、ここは城のすぐ下の中央市場。最も人気の多い場所だ。

俺が知るはずもない。

「……ここに来たことないやつ初めてみたぜ。さすが、ルシファ―だな。」

さすが、の意味が分からない。

ロイはキョロキョロとあたりを見回して、足を進めた。くるり、とこちらを向きなおしたロイは手招きをした。

「とりあえず、おもちゃとかそこら辺からどうだ？」

「こいつらが喜びそうだな。」

「そうだな。」

「おもちゃあゝ！！おもちゃっ、おもちゃっ」

喜ぶ姿をみせるソウ。しかし。

「……おもちゃってなあに？」

「なあにー??？」

「お前、知らないで喜んでたのかよ……。」

はあ、とため息がでるルシファーとロイだった。

初めてのおでかけ？（後書き）

お久しぶりです。

最近、パソコンが調子悪くてかけませんでした・・・。  
ごめんなさい・・・。

初めてのおでかけ？

「あのな、おもちゃっていうのはな……。えーと、あれだ！ 遊ぶものだ、遊ぶもの。あー……。メンドクサイ。本物みる、本物！」

ロイが説明してやったがいまいち分かっていなさそうなので、もうとりあえず本物を見せることにしたようだ。店には、たくさんのおもちゃが並んでいる。  
ホラ、とロイがおもちゃを渡す。積み木だ。

「わあー……。これがおもちゃあ？……。ただの箱？？」

「……。ロイに教えてもらいながら、ゆっくり見る。時間はあるから。俺はあっちで待ってる。買う物が決まったらロイに言え。」

「……。は！？ おまえも手伝えよ！ お前の子だろ！？」

「だれが、俺の子だ。だれが。」

周りから、ちよつと変な目で見られた。

だが、気にせず俺は、スイとソウに声をかけてから近くのベンチに座った。

(こんな風に外へ出たのは久しぶりかもしれないな……)

いつもなら、必要最低限な物だけ買ってすぐに家へ帰っていた。

無駄に長居すると面倒なことになりかねない。特にロイといると。

少し、上を見るとフードの下から太陽の眩しい光が入ってくる。

俺は、目を細めた。

おもちゃ屋の方を見るとスイとソウがそれぞれ違う反応を見せながらも喜んで見えた。

ロイも、説明しているが面倒だと言いながらこちらもまんざらでもなさそうだ。

子供が好きなのかもしれない。

おれは、ふと思った。あの竜達は、ロイに懐いている。ロイも子供が好き・・・そうに見える。

だったら、俺は要らないんじゃないかと。ロイに全部任せてしまってもいいんじゃないかと。

いや、もうすでに半分以上任せている。だったら・・・。

視線の先には、スイとソウとロイ。まだ、楽しそうにしている。

俺は、前の生活に戻りたいのだろうか？

・・・いや、戻りたいに決まっている。

何を考えているのだろう。ずっと、戻りたいと思っていたのではないか。

『ふん。情がうつつたな。』

ふと、聞こえた声。

レイだ。

『話しかけてもないのに勝手に聞くな。お前は、いつもいつも・・・』

『はいはい。勝手に聴こえてくるんだからしょうがない。で、離れるのか？あいつらから。』

『お前は、離れてもいいのか？』

レイにとっては城から離れると不都合だろう、と俺は言った。

『まあ、不都合っちゃあ不都合だが、別に大丈夫だ。最終的にはお前次第だな。』

『俺次第・・・』

周りには聞こえない声で話す俺は、他から見るとボーっとしている

ようにしか見えないだろう。  
俺は、ずっとロイたちを眺めている。

ふと、こちらに気づいたスイが「こちらに來い」と手を招く。  
俺と一緒に見たいのだろうか。

『別に今決めなくてもいいんじゃないか？おれは、このままの方が  
都合だな。』

『・・・そうだな。』

おれは、ゆっくりと立ち上がった。そして、ゆっくりと歩き出す。

たまには、こうやって外に出るのもいいかもしれない。  
そして、俺にあんな笑顔を向けてくれる人のそばにいるのも。

もう少しだけ・・・。

## 初めてのおでかけ？（後書き）

ちよっと、ヘタレなルシファーになっちゃいましたね……  
ルシファーくん、まだ慣れないことに迷っています。。。

ちよっと、同じようなことをループさせている気がするのでそろそろ発展させようかと……。

誤字・脱字があったらよろしくお願いします。感想・評価をして  
くれると励みになります！

紅い瞳の不都合？

眩しい太陽がああ山に沈むころ・・・

俺たちは、城に帰っていた。

「うん・・・。疲れたなあ。お前つてば、本当に全部オレに任せ  
るんだもんなあ・・・。」

お前は、ずっと眺めてばかりいやがって。」

「お前だつて、楽しそうにしてたじゃないか。」

あの後、数件はおもちゃ屋をまわったのだ。

それに、付き合っただのは全部ロイなのであった。ちなみに、ルシフ  
アーは遠くから眺めていた。

「う・・・、いや、まあ、楽しかったけど。まあ、いいか。とり  
あえず、飯食おうぜ。メイド、呼んでくるわ。」

そういつて、ロイは部屋を出た。

ふう、と息を吐いてから遊んでいるスイとソウを見る。

それぞれ手には、2体の50センチほどのよく分からない虫を模  
った人形を持っている。

ソウは、ぶつかけたり叩いたりして遊んでいるので、もう手が取れかけている。だが、スイはそれをじっと見つめているだけだった。

ふと、ソウがこちらを見た。

「ルシ、一緒にあそぼ〜！」

「え？ あ、ああ……。」

とりあえず、竜たちの前に座ってみるが何をしていたかわからない。じっと、人形をみつめる。

「……ウーノっていうの……。」

「？」

スイから話しかけられるが、何を言っているかが理解できない。

「それ、ウーノって付けた……。」

「ああ、この人形の事か」

こくり、とうなずいた。

スイは、この虫のような人形に名前を付けたようだ。そして、人形を手に取りぎゅっと抱きしめた。

どうやら、お気に入りになったようだ。このセミのような人形を。

おれは、よしよしと頭を撫でてやった。スイは目を細め気持ちよさそうにしている。

「あ！ ずるいつ！ ルシ、ぼくもーっ」

それに気づいたソウが間に割り込んでくる。スイは、眉をしかめる。

「……邪魔……」

「……なにしてんだよ」

ワーワーとケンカをする竜たちを眺めている。止め方が分からないので見ているだけーと言葉とともにそこに立っていたのは、ロイだった。手にはご飯ではなく薄い本。

「遅かったな。飯は？」

「あ、ああ、それは頼んできた。いや、それどころじゃなくて、これ見るよ」

渡されたものは、城下町で一番人気のある週間誌だ。表紙にドドント 『週間誌 スクープ×スクープ』と書かれている。その他には、今最近の話題が細々と書かれている。

「これがどうしたんだ？ 別に何も……。というか、初めて見たぞ、こういう週間誌を。」

中のほうもパラパラと捲るが、何の異常もない。これが、なんだっというんだ？

「……いや、もっと中身を見よつぜ。ほら、題名のすぐ下のス

クープみてみるよ！」

題名のすぐ下……。『週間誌 スクープ×スクープ』のした……。あつた。えつと、なにになに……。

『今代の竜使い（ドラゴンマスター）が登場！？しかし、その瞳は災厄を呼ぶ紅い瞳の持ち主だった！！』

別に事実がのつてるだけじゃないか……。

首をかしげる俺をみて、ハアと深いため息をつくロイ。

「おまえ、この一大事が分かんないのか！？ 紅は、災厄とも言われる色なのにそんな色をあの偉い竜使いが持っている。このことを知った民達も大騒ぎだぞ。……まだ、隠しておきたかつたんだが、どこから情報が漏れたんだか……。」

ガシガシ、と頭を掻くロイ。 あ、と何か思い出したように声をあげる。

「あ、そうだった……。ルシファー、一週間後に竜使いの紹介をすることになった。飯食ったら王の間に来いだとさ。とつとつ、食うぞ。王を待たせると臣下が怒るぞ。」

「……は？」

「だから、とつとつと食えつて！」

そういつて、運ばれてくる異様に量の多い料理たち。

いまだ、理解できていないルシファーは言われるままに料理を口に運んでいった。

## 紅い瞳の不都合？（後書き）

相変わらず、亀更新ですみません・・・。

ていつか、もう世界設定がメチャクチャですね・・・。  
なに、スクープって。。。

感想・誤字脱字あったらお願いいたします。

紅い瞳の不都合？（前書き）

少し、読みにくいかも。

## 紅い瞳の不都合？

王の間の番をしている兵士に一言言う。扉を開けて貰うためだ。ロイは、先にいるらしい。

「ルシファー様のお入りです！」

兵士は、そう言って扉を開けた。

中には、ロイと王様と数人の文官・武官がいた。おそらく重臣達だろう、と推測する。

カツカツ、と大股で歩み寄り、跪く。

「遅れて申し訳ありません。」

敬語は苦手だが、王に対してなので仕方が無い。

「よい。頭を上げてくれ。今は、そんなに畏まらなくてもよい。ここに居るのは、重臣らだけだから。」

「はい。」

頭を上げる。

「さて、さっそく本題だが・・・、アルナド。」

「はつ。私は、宰相のアルナドと申します。・・・ロイ王子から事情はお聞きに？」

アルナドという男は、年は60前後と思われ、灰色の髪にあごひげを生やしていた。

宰相というからには、とても王に信頼されているのだろう、と思った。

「はい。私が、竜使いだと民に知れたと。」

「ええ、そのことで1カ月後に改めて紹介することになりました。

しかし、失礼ながら・・・、その瞳は民に畏怖を抱かせます。』

『紅』は災厄だと皆、信じきっております。その考えを直させるのはとても難しいことです。数年、いや数十年かかるかもしれません。』

そこで、いったん話を切った。1、2拍おいて、また口を開く。

「しかし、もう竜使いの契約をしてしまった以上、竜使いは代えられませぬ。もう、ありのままの事実を見せることしか方法はございませんぬ。1カ月後、民の前に出てもらうことによろしいですね？」

俺に尋ねてきてはいるが、選択肢などほかに無い。俺は、こくり、とうなずいた。

「では、これから礼儀・作法やこの国の歴史などを学んでいただきます。」

「・・・は？」

今、何かおかしなことを聞いた気がする。空耳か？

「あれ？ 知らないっけ。竜使いの紹介では、他国の王族とかが来たりすんだよ。だから、今すぐに行うんじゃないかって1ヶ月も先なん

だ。」

ロイが説明してくれるが、俺にとっては大迷惑だ。

いままで、バレないようにひっそり暮らしてきたのにいきなり、王族やら何やらにどんどん知られていくんだな……。しかも、一番やりたくない礼儀・作法。

眉にしわを寄せて嫌そうな顔をしていると、後ろから声をかけられた。

「ルシファー様、これから礼儀作法と他国の言葉を指導させていただきます、アスリルです。」

その声の主は、俺よりすこし年上ほどのきれいな女性だった。ウエーブのかかったなめらかな金髪に透き通った水色の瞳。

「彼女は、侍女頭です。あと、歴史などの勉強のほうは文官のドルナードに指導させていただきます。」

今は、城にいませんので後日紹介させていただきます。」

アルナドが紹介してくれるが、どうでもいい。

とりあえず、これをやらなくてすむ方法はないのか。

「ルシファー、逃げるなよ・・・?」

ロイはなんでもお見通しなのか、俺が分かりやすいのか、その言葉にピクリと肩を震わしてしまった。

「おいおい、図星か？ まあ、やらなくなることなんて絶対無いがな。あきらめろ。」

デジャヴか。

もう、あきらめるのかなさそうだ。

「・・・、よろしくおねがいたします。」

はあ、これからが憂鬱でしかたがない。

## 紅い瞳の不都合？（後書き）

だんだん、ルシファアの性格が変わってきている気がするのはきのせいでしょうか？

新たにお気に入り登録ありがとうございます！

相変わらずの亀更新ですが、これからもよろしくお願いいたします。

誤字・脱字・感想ありましたら待っております。

## 授業？

次の日・・・。

さっそく、授業が始まった。

今日は、午前中は礼儀作法で午後からは歴史らしい。

はあ、とため息が出る。ちなみにもう一週間の時間割ももらっている。

どこかの学校みたいだと思う。まあ、金持ちしか行かないから俺も行っていないが。

とりあえず、朝食を済ませる。

目前では、竜たちも今日は竜型でガツガツとご飯（肉）を食べている。

竜たちのご飯は減っていくが俺の方はまったく減らない。

やはり、量が多すぎる。何回も言ってはいるのだが、ほとんど変わっていない。

今日のメニューは朝にも関わらず、パン類から始まりスクランブルエッグ、ソーセージ、果物数種類、ケーキ類、サラダもたくさん・・・。

朝からどんだけ食わせようっていうんだ。

城に来る前は、パン一個にほかに何かひとつ付けるぐらいだったの

に。

カチャカチャ、と礼儀悪く音を立ててもそもそも自分のには最後の一口を運ぶ。

扉を開け、誰も入ってこないと確認してからすっかり食べ終わっている童たちを呼ぶ。

そして、口を上向きに開けさせ料理を次々に上からそこへ落としていく。

バレると怒られるので、素早く行わないといけない作業だ。

よし、あともう少し……

今回は、いける！

と思ったが、最後の皿の中身を落とす前に、非常にも扉が開いてしまった。

扉を開けた主は、この光景をみて固まっている。

ロイかと思ったのだが、そこにいたのは 礼儀作法担当のアスリルだった。

「……な、何をなさっているのですか……？」

「いや……。食べきれなかったから……」

もうこれは、素直に言うしかないだろう。ほかに言い訳など思いつかない。

本日、何度目かのため息を吐いて皿をテーブルに置いた。

「もうそんな時間か？」

礼儀作法の時間はもう少し後だと思って油断した。 ゆっくり食べ過ぎたか。

「いえ、少し早めに来たのです。来て、正解でしたね……。」

俯いているので顔が前髪で隠れ、プルプルと体が震えているのは気のせいだろうか？

「王様が私を選んでくださった理由が分かりましたわ。ルシファー様には、基本的な事から厳しくお教えしないとけませんわね……！」

……。やはり、怒っていたのか。

それから、みっちり説教といすの座り方、歩き方まで基本の中の基礎しいを厳しく教えてもらった。スイとソウは、アスリルを見ておびえるほどの怖さだったのは言うまでも無い。

とりあえず、休憩時間。

といっても、敬語で話すようにとのお達しだ。

「ルシファー様は、竜使いになるまでは、何をなされていたのですか？」

「仕事か？・・・ですか？」

「ええ。」

「そうですね、ええと、仕事は転々としてました。・・・この瞳はバレルと厄介、ですから。」

なれない敬語というか、丁寧語で時々言葉に詰まる。

「そうなのですか・・・。お綺麗な色ですのに・・・。」

「？ この色が怖くないのですか？」

「はい。私はもともとこの国の人間ではございませんから。私の国では、紅は幸せの色ですわ。」

あなたが私の国で産まれていたならとても優遇されていたでしょうね。」

「紅が幸せの色・・・。」

とても意外なことだった。ほかの国では、そういう考えもあるのか。だったら、早くこの国を出たらよかった。と後悔しても遅い。

「ですが、この国でもこれからあなたの人生も変わりますよ。」

「……そうでしょうか？」

「はい。……ですので、礼儀作法のお勉強始めましょうか。」

「……はい。」

それから、またみっちりと教えてもらった。

くおまけく

「あの、アスリルさん。」

「はい、何でしょう？」

今は、授業が一通り終わったあとの休憩だ。

「いえ、朝食の量なんですけど、どうにかなりませんか？」

「え？ あれでもだいぶ減らしていると料理人から聞きましたよ。」

侍女達から何であんなに食べないのかと羨ましがられるぐらいでしたよ。」

「……あれでも多いと伝えておいてください。」

「1カ月後の紹介の席では、あれの数倍は量がありますよ。今のうちに慣れてくださいな。」

にっこりと微笑んで言われると何も言えなくなる。

俺の飯たちは、何時になったら適量になるのだろう？

当然、竜たちに食べさせることになりそうだ。

授業？（後書き）

アスリルさん登場。

とりあえず、がんばってみました。

次は、なんの授業にしようかなあ？

## 授業？

やっと、礼儀作法の時間が終わり、昼になった。

お昼を食べ終えてから1時間ほど竜たちと遊んだ。

スイは人形と遊び、ソウは積み木やらで遊んでいるのを見ていただけで時折、会話をするくらいだったが、竜たちはそれでも満足なようだった。

それが終わったあとは竜たちは侍女に預け、俺は授業の時間だった。確か、次の時間は・・・歴史か。

時間表を見て確認する。

そつえば、誰が担当なのか知らないな。

誰が来るのだろうか？

そんなことを考えていたら、コンコンとノックの音。

しかし、扉はすでに開いており、「入ってもいいですか？」という確認のノックではなく、「ここにいますよ。」という部屋の主に気づかせるためのノックだった。

そこにいたのは、ロイともう一人は神経質そうな30ほどの黒髪・黒瞳の男だった。

「よお、朝の授業はどうだった？アスリルに怒られなかったか？」

「・・・怒られた。」

「ははっ、お前、何やらかしたんだよ。まあ、アスリルは厳しいかな。」

「お前、知ってるのか？」

「ああ。俺もアスリルに習ったからな。いろいろと。俺は、優秀だったぜえ〜？」

優秀だった、というわりにはそんなに礼儀正しくはない気がする。このままだとロイの自慢話になりそうなので、話を変える。

「ロイ、そこにいるのは誰だ？」

ロイと現れた男は待たされているのにも関わらず、ただ、じっと俺を見ていた。

ロイは、あっと今気づいたようで男を紹介してくれた。

「忘れてたぜ。この男は、グリフォンっていうんだ。優秀な文官でお前の歴史担当だ。よろしくやってくれ。」

「グリフォンです。よろしくお願いします。」

その男は、にこりとも笑わなかったし、礼もしなかった。

ただ、言葉を述べただけだった。ただ、その瞳は俺を、いや、俺の瞳を見ていただけだった。

それが、少し不服で、しかし、当然のように感じられた。

ただ、最近は俺を拒否するものが減っていたので安心していましたが、まだ納得していない者もいるのだ。

俺の身の回りのことをしてくれる侍女達だって、目を合わせたことはない。最初は怯えが目立ったが、だんだん慣れてきたのか、それは無くなった。しかし、まだ緊張感のようなものは張り詰めたままだが。

俺は、まだ認められていないのだ。改めてそう感じた。

「ルシファー、です。よろしく願いします。」

俺は、ぺこりと一礼した。

それを見て、ロイは「お！」と声を上げ、

「授業の成果が出てんじゃん！ まあ、がんばれよあ〜」

そういつて、部屋を出て行ってしまった。

部屋の中は、シーンと静まり返った。

「……では、始めましょう。」

「・・・はい。」

沈黙を破ったのは、男のほうだった。

授業 ? (後書き)

今回は、少し短めで。

次は、国の歴史で。。。

誤字脱字、感想、どんなことでもいいのでよろしくお願いします。  
書いてくれると、少し、更新が早く・・・・なるかも？です。  
笑)

## 国の歴史

さっさと授業を始めることになった。

グリフォンは、国の歴史が書いてあるのか、分厚い本を取り出した。

「これには、国ができた頃からの歴史が載っております。次までに読んでおいてください。」

「・・・次までに？」

「ええ。まだ、これぐらいの本が4・5冊ありますので。」

「・・・。」

この、厚さ5センチ程もある本を次までに？ 確か、次の授業は明後日じゃなかったか。

試しにパラパラと捲ってみると、そこには紙一面にズラツと細かい文字。他には小さい絵や図が少し載っているだけの本。いままで、こんな本一度も読んだことないぞ・・・。

ハアとため息が出る。

次までに読めるかどうか・・・ 嫌がらせか？

とりあえず、この字だらけの読む気もしない本を閉じた。

「・・・では、始めましょう。」

そう言つて、出したのはまた本。今回は、先ほどより少し薄い。

「その本の10ページを開けてください。」

パラパラと10ページを開ける。だが、その数ページ前に色のついたページがチラツと見えた。指定されたページでは無いものの、なぜか気になり、行き過ぎた枚数を戻してみた。そこには字ではなく絵が2ページにわたり、紙いっぱい描かれていた。

そこに居るのは、1匹の巨大な金色の竜と 竜と同等の大きさの鳥の羽が生えた牙の鋭い獣。

だが、その獣の瞳は、血のように紅い。その絵の中で不気味に光っていた。

「これは・・・？」

『お、これ俺じゃないか。あいつまで載ってやがる。てか、俺はもつと美しいつうの。』

「は!？」

いきなり、レイの声が聞こえて思わず声を上げてしまった。

グリフォンは、いきなり声を上げたオレを訝しげに見ている。

オレは、あわてて「なんでもないです。」と返した。

「この絵を知らないのです？ では、国創立の話もしらなさそうですね。知っているものだと思います、とばそうと思つたのですが。」

知らないのか、と晒っているような声ではなく本当に意外そうな声だつた。

有名な絵なのだろうか？

こくり、と頷くと絵に視線を戻して、教えてくれた。

「簡単に説明するとこれは、この国が魔物に支配されていた頃の絵です。そして、ここに居る黄金の竜がわが国を助けてくださった。だから、今この国には竜が居り、紅色は災厄の色として避けられるのです。民なら皆知っている話ですが。ましてや、あなたのような人なら特に……。」

その話は、耳にかじった程度だが聞いたことがあった。だが、詳しくは分からない。教えてくれる人など居なかったのだから。もっと詳しく教えてほしいのだが……。

絵から視線をグリフォンに戻すと目が合った。すぐに、外されたがその思いが伝わったのかは分からないが、「最初に渡した本に載っている」と教えてくれた。

「では、時間がないので始めましょう。10ページは、国が創まったときの政治のことです。」

それから1時間程度、『大臣』だとか『××事件』というのをずっと教えられていた。

とりあえず、時折頷いては聞いていたのだがずっと頭からはあの絵

が離れなかった。

「それでは、私は仕事があるので。」

そういつてグリフォンは立ち上がり、出口へ向かう。

「あ、いや、えと、ありがとうございます。これからよろしくお願います。」

早足のグリフォンに急いで立ち上がり、礼を言う。

その言葉に驚いたような顔をしたが、頷いてくれた。

パタン、と扉が閉まりあたりが静かになった。

そして、オレはいすに座り、あの分厚い本を捲っていった。

## 国の歴史（後書き）

少し、長いです。

てか、結局歴史そんなに書いてない。

明日からテストなんですけど、時間があればできるだけ更新しようと思えます。

誤字・脱字・感想、どんなものでも待っておりますのでよろしくお願ひします。

## グリフォンの心境（前書き）

グリフォン視点です。

## グリフォンの心境

私　ーグリフォンは、王の間に向かっていた。

私は、かれこれ10年ほど城で文官をしている。　23の時からずつと王に仕えている。

10年、ひたすら王の助けに、そして、自分の出世のためにがんばってきた。

2年ほど前に文官長になった。

今回王に呼び出されたのは、文官長として用でもあるのかと考えていた。

しかし、呼び出された理由は予想とはかけ離れたものだった。

「1・2週間ほど前、竜使いが決まったのは、お主も見ていたな。」

「はい。あの紅い瞳の青年でしょう。名前は、ルシファーと言いましたか。」

私も竜使いが王に謁見したときに、広間に居たのだ。

初めは、ただの青年に見えた。ただ、王に顔を見せぬなど失礼なやつだ、としか思っていなかった。

しかし、あの瞳を見たときには全身が震えた。あの、血のような赤い、否、深紅の瞳。

この国では、災厄・魔だとも言われる恐怖の色。

この国の古い歴史、国を支配していたあの魔物のようではないか！

そう思った。しかし、竜使いになった今ではだれも城、いや、国から追い出すことも殺すことさえもできない。竜を育てるものがいなくなつては、この国に竜の加護が無くなつてしまうのだ。何とも滑稽なことだった。この国に忌まれる者がこの国の未来を背負うのだ。

だが私には、関係ない。恐怖に苛まれるくらいなら、関わらなければいいのだ。

そう考えていた私には、何故竜使いの話を持ち出されたのかが分からなかった。

「ああ。では、約1ヶ月後に竜使いの紹介があるのも知つておるだろう。」

「ええ。」

何か、嫌な予感がした。

「そこで、だ。あの竜使いは民からの出だ。礼儀も作法も知らぬ。国の詳しい歴史も知らぬ。言いたいことは、分かるか？」

まさか、と思つた。

「・・・私に歴史や作法を竜使いにお教えしろ、というのですか。」

「その通りだ。やつてくれるか？」

正直、そんなものはやりたくなかつた。関わりたくも、見たくもな

い紅い瞳を持った竜使いのために仕事が増える。王のためとはいえ、これだけは断りたかった。

「申し訳ありませんが、今私は自分の仕事で手一杯なのです。礼儀や作法に歴史などをお教えさせていただく時間がございません。・・・空いている者でよければ数人ほどいますが。」

「いや、教えるのは歴史だけでよい。しかも、1週間に2・3回程だ。若いがお前は人にものを教える才がある。だから、お前がよいのだ。やってくれ、グリフォン。おぬしを信用して言っているのだ。もちろん、給金も上げる。やってはくれまいか。」

王にそこまでいわれると断れない。

「・・・はい。承知いたしました。」

「そうか、やってくれるか。では、明後日にロイが迎えに来るからイチからすべて教えてやれ。もちろん、竜使いだからといって手加減はしなくてよい。では、頼んだぞ。」

時間をできるだけ短くして、教える時間を減らして乗り切ろう、このときはそう考えていた。

2日後。とうとう、この日が来てしまった。

「グリフォン、いるか？」

「はい。わざわざありがとうございます。」

「いいって、いいって。それよりも、ルシファーにどんどん教えてやってくれ。」

ロイ王子は、竜使いと仲がいいようだった。それ故に、どんな人物なのかを聞いてみたくなった。

「あの、竜使い殿はどんな方なのですか？」

「ん？ああ、気になるよな。ん、別に普通のやつだぜ？まあ、ちよつと無口な気もするけど最近よく話すようにもなったし。ま、気楽にがんばったらいいさ。」

「はい……。」

聞いてはみたが、まったく分からなかった。

初めて見たときは、分からなかったがその青年は整った顔立ちをしていた。

そして、瞳も忌まれる紅でも澄んだ透き通るような色だった。

そして、ロイ王子は行ってしまい2人きり。とりあえず、授業を始めてはみた。

しかし、国の始まりの話を知らなかったのだ。民は皆知っているの  
で飛ばそうとしたが、まさか、知らなかったとは。

『紅』が忌まれる理由ともいえるはなし。

それを知らないのは、とても意外なことだった。

だが、私にそれを教える時間はない。それを省いた上でのこの時間割なのだ。私には、まだまだ仕事がたくさんあるのだ。本のページだけ教えておいて、先に進んだ。

教えがいがある青年だった。少し、あの絵のことが気になっているのか分厚い本をちら見しているが、こちらの話もしっかり聞いてくれる。

災厄の瞳を持っているにしては聡明で勿体無いと思った。文官にしたらずぐに上に上ってきそうだ。そう思った。

『ありがとうございます。これからよろしくお願いします。』

拙い敬語でそう言われたのは、とても驚いた。

紅い瞳を持った青年は、しっかりと礼儀を持った人間だったのだ。

だから、もう少しだけ授業の時間を増やしてもいいかと思った。

すこし、そんなことを考えてグリフォンは文官としての仕事を片付けていった。

## グリフォンの心境（後書き）

少し、長いです。

まあ、閑話的な話ですかね？途中、何かいているのか分からなくなりました（泣）

とりあえず、グリフォンの複雑（？）な心境でした。

## 昔々の物語

ペラペラ、と本を捲つて「そーいえば、最初の方つて言つてたな」と逆方向にペラペラパラパラと捲つていく。静かな部屋には本の捲る音が静かに響いている。しかし、ルシファーの内ではレイなかの音がうるさいほどに響いている。

『なあー、オレが教えてやろうか？そんな分厚い本見なくなつて、この生きる歴史が教えてやろう！』

「……。お前、何年生きているんだ？」

まるで、国の始まり当時から在るいような口ぶりに疑問を感じ、問いかける。

『ん？言つてなかったっけ？オレはこの国ができる前から……。あ、このページじゃないか？』

「あ？」

そこを見るとそのページは、絵本のような構成で書かれている。もう少し前に戻ると表紙までついている。子供向け用のを載せているのだろう。絵もさつき見たリアルで綺麗だが迫力のある絵ではなく、可愛らしい女の子でも好みそうな絵だ。中身の挿絵も似たような絵だ。

……これを読むのか？ 大の大人が？ていうか、何故絵本……。

誰かに見られたら変な趣味だと間違われそうだ。  
数秒じつと見つめ、表紙の次のページを捲った。

むかーしむかし、まだこの国も名さえなく、そんなに発展してもなく貧しくもほのぼのと暮らしていたころ。

ある一匹の名もない魔物が住み着いてしまいました。その魔物は、大きな牙に四本の足、背中の翼、そして何より真つ赤な体に真つ赤な目。人々からとても恐れられていました。

魔物は、やりたい放題でした。畑を荒らし、商品を盗み、人を傷つけました。

人は、困りました。自分達には、魔物は倒せないのです。

だんだん、そこに住んでいた人々から元気も無くなり、他国からも商人や客も来なくなってしまう生活も貧しくなっていきました。

あるとき、また魔物が人を傷つけようとしたときです。

遠くから生き物の鳴き声が聞こえました。 竜です。

竜は、魔物と3日3晩戦つてとうとう勝ちました。そして、言ったのです。

『弱き人間よ。お前らが生きなければ我らの子を育てるがよい。育つた竜がまもり、その子がまた守り、この国を発展させるだろう』

それから、この国は竜の国とも呼ばれ、今があるのです。

子供用の絵本。

だからこそ、こんなに表現は軟らかいが本当はどうなのだろう。

これが、俺が忌まれる原因。いい迷惑じゃないか。

すこし、怒りが湧き上がっていたとき内側から声が。

『・・・これ、本当じゃないぜ？』

「は？」

『確かに魔物には襲われてはいたが、俺じゃない。』

「俺じゃない”・・・？ お前は・・・、何者だ？」

『くくく・・・。今更かよ？ オレは、オレだ。』

まあ、昔は名もない紅い神って呼ばれてたがな。 国が始まるより前から在る存在。目を閉じる。』

そういわれて、素直に目を閉じる。

そこに映るは、黒ではなく、暗闇の中に佇む獣。 赤、否、紅に染められた気高き獣。

『オレは、神。この国の守り神ともいう存在。』

「ま、今は休業中だな。』

俺の中のオレは、とんでもないことを言い出した。

## 昔々の物語（後書き）

はい。おひさしぶりです。

なんやかんやでおそくなりました・・・。

いまは、夏休みなのでもうちょっとがんばりたいと思います。

あと、たくさんの方が読んでくださってとてもうれしいです！

ありがとうございます！！

これからも、よろしくお願いいたします。。。

## 竜の失踪 ?

「それは、何かのじょうだんか??」

『おいおい、オレを信用できねーのかよ？ オレがお前に嘘をついたことがあるか?』

「・・・ない、な」

『そーだろう。オレがここに居るのだってちゃんと意味があつてだな・・・』

「意味?」

『あ、いけね・・・。これはまだ秘密、な』

「はあ!?!」

自分から口を滑らしておいて、黙っておくというのはとても気がかかるものなのだ。

言った以上、責任はとってもらわないと。

オレは、くいさがらない。

「お前、自分で言っておきながらそれはないだろう。」

『いや、それはすまない。ちゃんと契約があつてまだ話せないんだ。ゆるせ。』

「契約？」

それはいったい誰との？と聞こうとしてやめた。

誰かがこちらへ来る気配がしたのだ。

「おい、また後で詳しい話、聞かせてもらっぞ」

『・・・はいはい。話せることだけなら、な』

その言葉と同時に扉が開く。

「授業は終わったのか？」

「ああ。」

そこに居たのは、この国の王子、ロイだった。

「何しにきた？せめてノックぐらいしろ」

「おいおい、用が無きゃこの部屋来ては行けないのか？・・・親友なのに・・・」

おいおい、と泣くフリをするロイにため息をつく。

「用は、ないのだな？」

「あ、待って。今回はちゃんとあるって！..」

オレの言葉を聞き、少しあわてるロイ。  
これからは用が無くてもくるのか……。

「いや、竜たちがどっか行ったからお前のところかなーと。」

「スイとソウが？いや、来ていないが……。」

「ん〜、そうみたいだな。一体どこに行ったんだ？」

スイとソウは、まだ1人（2人）で行動してはいけない。行動するには、竜としてはまだ、幼すぎるのだ。竜は、2ヶ月ほどで1人で城の中をうるついてもいいようになるのだ。1年で外に出られる。まだ、1ヶ月も経っていない2人は、付き添いがあるのだ。

「探すか？」

「ああ、頼む。」

オレは、コートを取ろうとするが、ロイに止められた。

「あ、ここから読んでやれば、多分呼びかけがあるはずだ。呼びかけが無ければ、反応できない状況にいることとなるんだ。竜使いと竜は血と契約で繋がっているからな。」

「……そんなこと初めてきいたぞ。」

「あ、いつてなかったけ？」

詫びれも無くそんなことを口にするロイ。2度目のため息をついてから、竜の名を呼んだ。

「スイ、ソウどこにいる？」

《ルシー??》 《ここにいるよー》

部屋の中に声が広がる。

「おお、すごいな。一度で繋がるとは……。これには、ちょっと練習がいるんだ。すげえ相性がいんだな。」

《ルシも来てー!》

《お母様と呼んでる》

「……お母様？」

また知らない単語に困惑するルシファーだった。

竜の失踪 ? (後書き)

今までごめんなさい!!

パソコンの調子が悪くて書けませんでした!

これからは、がんばります! 何回も聞いた言葉だ・・・

>  
<

やっと、竜が出てきましたあ

なんか、どンドン違う方向に進んでいるような・・・

## 竜の失踪 ?

とりあえず、一部始終を聞いていたロイに案内してもらって「竜の塔」というところに来た。

「竜の塔」とは、城の裏にある森の中の最も奥にある大きな塔のことだ。ロイが言うには、普段は竜の力で隠されているらしい。今回は、俺らにだけ見えているらしい。

「あー、ここだよ、ここ。久しぶりに来たなあ。」

「前にも来たことがあるのか？」

「ああ。子供の頃にな。まあ、今は、まったくないがな。」

そう言って、塔の大きな扉に両手をついた。

「ちょっと、しずかにしてろよ。」

我等が神、竜よ。我、ロイニナルフィーナの名においてこの重き扉を開けたまえ。」

そう唱えると扉がギイと音を立てて開いた。

「よし。はいるぞ。」

ニコリ、と笑って塔へと足を進めた。

『ふん、お前らの神はオレだというのに。』

そんなレイの声が聞こえた気がした。

塔の最上階、そこに竜が居るということで長い螺旋階段を上っていく。

最上階といってもそこにしか部屋は無いらしく、何階かということ実際には2階ということらしい。

それでも、50Mほどある塔の階段というのはとても長い。

歩いて30分ほど・・・。

やっとついた。

そこは、城の広間と同じような造りだった。だが、城ほど煌びやかではない。豪華というよりも落ち着いた雰囲気だ。

その部屋の真ん中に居るのは、スイとソウと1人の女性だった。

その風貌は、腰まである蒼き髪に夏の空のような澄み切った水色の瞳。とても美しい人だった。

「ようやっと来たか。待ちくたびれたぞ。もっと早よう来んか。」

凜とした少し低めの声が部屋に響き渡る。

その声で俺らの訪問に気づいたソウとスイが手を招いて俺を呼んだ。

「ルシ、こつちだよ〜!」「来て……。」

その声の主達にゆっくり歩み寄った。  
ロイも後ろからついてくる。

「ほう、その者がわらわの子達の使い（マスター）か。美しい風貌よの。紅い瞳とは災難な。苦労しているであろうなあ。」

ふっと笑ったその瞳は、オレを見ているが俺を見ていないような気がした。  
もしかしたら、この人はレイの存在を知っているのかも知れないと思っ

た。（いや、何を考えている？知っているはずが無いではないか。初対面なのに……）

自分のわけの分からない思考に惑わされる。

そんな自分に戸惑っていると、後ろでロイが動いた気配がした。  
思わず後ろを向くと膝について頭を下げていた。位が上の人にする礼、例えば王などにする礼だ。

「お久しぶりでございます。我らが竜、イグリナ様。」

「そのような礼はせずともよい。久しぶりに会ったというのに寂しいのう。」

「そんな訳にはいかないでしょう？イグリナ様。この国の神という存在に礼もしないというのは。」

「おや、この者はせなんだぞ?」

急に話が振られて驚いたが、確かに礼はしていない。

そもそも、この女性が竜だとは思っていなかった。スイヤソウと同じく人型になっているということか？

とりあえず、簡単な略式の礼をしておいた。それしか知らないからだ。

「ふふっ、わらわに略式か。本当に面白い者よのう。わらわはイグリナ。蒼き竜じゃ。お主は？」

「ルシファー……」

「ほう、ルシファーというのか。よい名じゃの。まあ、ここに呼んだのは、竜に関してのことじゃ。本来ならここに呼ぶのはもっと先なのじゃがこの子達が、早くと急かすのでなあ。」

「ルシファーなら大丈夫。……ルシファーだからこそ急がなければならぬ。」

「うん。ルシファーが竜使いだからこそ。それが運命だから。」

「ふふっ、この子達は優秀じゃな。ちゃんと役目を分かって居る。では、始めようか。」

俺は「？」を浮かべるばかり。だが、ロイはなにか気づいたようだ。驚きが顔に出ている。

「それは、もっと先に、本来なら1ヶ月経ってからと教わりましたが……。あれには、もっと竜との関わりがあるのではなかったのですか？」

「いや、これも決められている。そうでなければ、この者は選ばれなかったというだけじゃ。」

「どつという意味ですか!？」

また、話はルシファーを置いて進められていた。

慰めのように、いや違つかもしれないがいつのまにかルシファーの両の手はスイとソウに握られていた。

まるで、準備万端!というような顔をしながら。

竜の失踪 ? (後書き)

今回は、少し長くなっちゃいましたね・・・。  
笑いもなんにもないよー(汗

竜の失踪、あと1話ほど続くかな？  
でわ、また次話で。

## 竜の失踪 ?

まだ言い合っている2人。いや、1人と1匹か？

「あれには、危険が伴うと・・・！」

「だから、何度も言っておろう。これが運命だと。」

「だから、運命ってなんなんだよッ！・・・オレだけいつも置いてけぼりにしゃがって・・・。」

ロイが最後に何かをつぶやいた気がするがよく聞こえなかった。イグリナは、なぜかニヤニヤと笑っている。

「愛されておるなあ。ルシファーよ。」

「？」

その言葉にロイは少し赤くなっている。風邪でも引いたか？

「？」を浮かべながらふと気づいた。手をつないでいたはずの2人（2匹？）の手が離れている。

下を見たら何かを白い石で描いている。

「スイ？ソウ？何をしている？」

「ん〜？お母様が始めないから僕らで進めてるんだ！」

「まだ、いっぱい描く……。そこ、描くから退いて？」

「あ、ああ。」

その絵、というよりも何かの陣のような……。  
だんだんと文字や線の密度が高くなっていく。  
そして、竜たちの手が止まった。

「できたよー！」「完成……。」

「おお、よくできたのう。さすがは我が子じゃ。」

「ん〜。ルシも褒めて？」

ソウの言葉にこくこく、とスイも頷く。

その言葉に、そうつと二人の頭に手を置いて優しく撫でてやる。  
二人は撫でてもらってうれしそうな顔をしている。

「本当に仲がよいのう。これならいけるのではないかのぉ。そろそろ始めるぞ。ロイももうあきらめろ。部屋から出ておけ。巻き込まれるぞ。」

ロイは、まだ納得をしていない顔をしているが出口へと足を進めている。  
扉が閉まる瞬間、「絶対にかえってこいよ。」と聞こえた。

「さあ、やるかの。」

「うんー！」「……やる。」

「始めるってなにを……。」

すべてを言う前に竜二人につれられて陣の中心と思われる場所へ連れて行かれる。

「では、いくぞ。」

「だから、何を・・・」

イグリナは手を掲げる。その手がだんだん蒼い光を伴っていく。

《竜よ、我に応えよ。竜の試練、使いの試練へ向かうか？向かうのであれば、さあ、自らで扉を開けよ。》

《我らが母よ。我は、使いとともに試練へ向かう。》

《私の片割れよ。共に試練の扉を開けよう。》

《古き竜よ、我らに応えその扉を開けよ。》

2人の小さな竜も手を掲げる。ソウは白い、スイは黒い光を伴っている。

そして、目前に大きな扉が現れた。そして、ゆっくりと開いていく。それと同時に意識が朦朧としていく。視界もぼやけてくる。

「さあ、竜使いの2つ目の試練だ。行って来い、我の子よ、ルシフ  
アーよ。」

そして、視界が真っ暗になった。

## 竜の失踪 ? (後書き)

ロイは意外とツンデレ??

ルシファーはいつも置いていけぼりで話は進んでいきます。

あと、鈍いです。

あ、愛されているといってもラブではないですよ!・・・多分?

BL設定にはしてないですから(笑)

新しくお気に入りに入れてくれた方、ありがとうございます!

そして、いままでも呼んでいてくださる方にも感謝です!!

でわ、また次話で^^

忘れられた過去（前書き）

暴力表現注意！！

あと、すごいシリアス&暗いです・・・（汗

10/10 サブタイトル編集

## 忘れられた過去

ゆっくりと意識が浮上する。

「ん……？……ここは……？」

まだ、頭が覚醒していないのだろうか？あの大きな石造りの広間では無い気がする。

茶色……、どこか民家の家の色。……ということは、城でもない？

急にぼんやりとしていた頭がはつきりしてきた。

「ここは、どこ……だ？」

そこは、やはり先ほど考えていた通り民家だった。

ゆっくりと立ち上がる。ぐるりと見渡すと、どこかで見たような家だった。

10畳ほどの部屋。左右の壁に1つずつ扉と、後ろの壁には小さな窓がついている。

ズキズキと頭が痛む。

手を頭に置いたところでふと気がついた。

「ソウ？スイ？……イグリナ？」

場所が変わっただけでなく、今まで居た者達までいなくなっている。

「ここは、一体・・・？何が起こった？」

そういえば、子竜達がなにか陣を書いたかと思えば、急に意識が・・・。

とぼんやりそんなことを考えていると、足音が聞こえる。

ガチャリとドアノブが回ったところで、ハツとした。これでは、不法侵入になるのでは？

だが、そんなことを考えたところで遅かった。もうドアは、半分開いている。

そして、そこにいたのは・・・。

小さな黒髪の子供。なぜか、顔がよく見えない。

その子は、キヨロキヨロと部屋を見渡している。  
それなのに、オレには気づかない。

「おい・・・？勝手に入ってすまないが、ここはどこか教えてくれないか？」

そういいながら、その子供に近づく。

その子もゆっくり中に入ってきて、向かい合わせになった。

「・・・。」

しかし、その子からの応答はなかった。不思議に思っていると、

次の瞬間。

なんと、自分の体を通り抜けてその子は部屋の奥に進んでしまった  
ではないか！！

オレは、自分の手を見た。別に変わりはない。しかし、その子供に  
は俺が見えないし、触れないのだ。  
一体、ここはどうなっているんだ？

とりあえず、その子を見ようと振り返るとグニヤリと視界が揺らぐ。  
視界がグチャグチャになる前に、その子がこちらを向いて晒った気  
がした。  
紅い瞳を不気味に輝かして。

---

視界がハッキリしてきた頃。

ここは、また家の中？ いや、でも視界が先ほどと違う。なんと  
くいつもより目線が低い。

でも、やはり家の中でさっきの家と同じようだ。  
だが、そこにはすでに人が立っていた。

四十ほどの女性が目の前に立っていた。

顔がよく見えない。でも、知っている。

そして、この人は怒っている。なぜか、そう思った。悲しんでいる。悔やんでいる。

そして。

誰かを憎んでいたはずだ。

・・・どうして、そう思う？

意味の分からない自分の思考に戸惑っていると、その人が何かをしやべっている。かすれて、途切れ途切れの声が聞こえてきた。なんていっているのか分からない。でも、おれは、この言葉をたくさん、たくさん聴いた。

ズキズキと頭が痛む。

「あ・・・がいる・・・ら！　ル・・・アーなん・・・ていなければ！！」

手が拳がり、俺に振り降ろされた。

その手は、俺の頭に直撃して、俺は横に派手に倒れた。

そのとき、初めて気がついた。

自分の体が縮んでいる。これは、子供の体。もしかして、さっきの

子供の体？

触れられなかったはずなのに、打たれた頭や床にぶつけた肩や体がそこら中痛かった。

【痛い。痛いよ……お……さん。】

子供の声。

【どうして、僕をたたくの？ ……さん】

コレハ、思イ出シテハイケナイ。

俺と一緒に場所に居たはずだったのに、黒髪の子はいつの間にか目に前に居た。

首をかしげて聞いてくる。

イイノ？思イ出シテモ？

俺は、何を知っている？何を思い出してはいけなんだ？しりたいたい。思い出したい。

そして、その子は晒った。

コレハ、ワスレラレタキオク。

馬鹿ナヒト。忘レテイタラ楽ダツタノニ。

ぼんやりと動かない俺に苛立ったのか、髪の毛を捕まれて無理やり上半身だけ起こされる。

また、その女性が叩く。今度は、はっきり聞こえた。

「あんだなんて生まなきゃよかったツツ！！悪魔の子、災厄の子なんて、最悪だわ！！私の子じゃない、私の子なんかじゃないわ・・・ツ！！こんな瞳・・・！！！」

また、殴られる。そして。

「あんだなんか、いなければよかったのに！！ルシファーツツ！！！」

はっきりと聞こえた己の名前。

そうだ。思い出した。

この子は、俺で。

この人は、俺の母さんで。

これは、俺が殺される日だった日だ。

## 忘れられた過去（後書き）

シリアスですねえ・・・。

ちよっとおそくなりました><

あと、今週・来週忙しいので更新遅くなります。  
スイマセンっっ

でわ、また次話で。

読んでくれる人がたくさん居てくれて本当にうれしいです!!  
感想や誤字・脱字あったらお願いしますね!!  
力になります!!

紅登場（前書き）

暴力注意！！

## 紅登場

そう、これは己の過去の記憶。  
今から12年前。7歳のとき。

最初は、黒かったそうだ。髪も瞳も。

父はくすんだ銅色にオレンジの瞳で、母は黄緑色の髪に茶色の瞳。

なぜ、俺だけ黒いのか不思議だったが念願の子ができてうれしかったらしい。

そう、俺に4、5歳くらい小的时候に言ってきた覚えがある。

俺だって幸せだった気がする。

だけど、5歳の誕生日。

瞳の色の突然変異。

災厄の色と呼ばれる『紅』

恐怖に支配されたあの顔。

俺は何が起きたかなんて分からない。不安に駆られて母さんの掴も  
うとしたら、

パシッ

振り払われた自分の腕。赤くなった手の甲。

俺の、親にも触れない最悪で不幸な新しい人生の始まり。

それから、親に殴られながら育った。

ふと外に出たときには近所に見つかって、罵られて、殴られて。

親もその被害にあって。

その怒りと悲しみに俺を殴った。

毎日がその繰り返し。

いつからか、父がいなくなった。

母は、何も変わらなかった。

そんな日々が続いたある日。また、誕生日。7歳になった。

さっきの場面。

勝手に外に出たのがいけなかった。

ただ、窓から見えた綺麗なオレンジの花。父の瞳のようで、例え毎日殴られようと愛しい自分の母にあげようと。

ただ、頭を撫でて「ありがとう」と前みたいに言うて欲しくて。

でも、勝手に外に出て行ったのが見つかって。

殴られた。

手の中に閉じ込めていた花を、花びらも何もグチャグチャな花をみて、顔をゆがめた母。

そして。

「あんたがいなければ、父さんも帰ってきてくれるかな？私も幸せになれるのかなあ？ねえ、ルシファー？」

優しい声だった。でも瞳の焦点は合っていない。光もなにも見えなくて。

母さんは、台所に向かった。

今日は、もう殴られないのか、とほっとしたところに再度現れる母。手には、包丁を持っていた。

「あんたを殺せば、父さんも私の幸せも私の本当の子供も帰ってくるの。」

ゆっくりと近づいてきて。

殴られて動けない俺の上に乗って。

「……ばいばい、私の子。」

振り下ろされる煌く包丁。

俺には、その刃が輝いて見えた。もう、終わるのか。やっと、終わらせてくれるのか、と。

母は、救われたかったのだろう。

自分の子がこんなになって、ひどく絶望に落ちいったのだろう。でも、自分の子だから愛したくて、でも紅い瞳が信じられなくて。

たとえば、殺されようとも母なら許せた。それでも、好きだった。

目の前に迫った、次の瞬間。

『自分の人生、そんな簡単にあきらめてんじゃねえぞ！！この馬鹿が！！』

そんな声が聞こえた。

紅登場（後書き）

THE シリアス （笑）

次もシリアスになるかと・・・><  
もうそろそろ、この試練を終わらせてあかるく・・・！！  
なるかな・・・？

でわでわ、次話で

## 贈り物

自分とも、母親とも違う声だった。

高いようで、低いようによく分からないが、綺麗な声。

そんな声が聞こえた瞬間、時間が止まったように母が動かなくなった。辺りが色褪せて見える。

『目を閉じる』

そう言われて、自分で閉じようとしたわけでもないのに勝手に瞼が落ちていった。

そこに居たのは、もう一人の自分だった。否、紅い獣だった。いや、やはりもう一人の自分なのか？

やはり、形もはつきりとせず、ぼやける。どちらが本当の姿なんだろう？

『お前はここで死にたかったのか？あの母親に自分を殺させてよかったのか？』

そうだ。もうすぐ終わるんだ、自分の人生は。終わらせるべきなんだ。

本当に？

ふと、そんなふうに思った。いや、思ってしまった。  
一度、あふれた疑問は核心に触れて。

・・・そして、確信となる。

「い・・・やだ。俺は、・・・生きたい。母さんに俺を殺させたくない。」

『お前の人生はここで終わっていいのか？お前の母親に終わらせられるのか？』

「ちがう！俺の人生は、俺のものだ！！」

そいつが、ふつと笑った。綺麗でみんなが幸せになれそうな微笑み。

『そうだ。その意気だ。お前は、お前だけのものなのだから。・・・これから、よろしくな。』

「え……？」

そして、世界は動き出すのだ。

この後、俺は母親からどうにか逃げ出して1人で暮らすようになったのだ。

レイに助けてもらいながら。

そのときに、『レイ』と名づけたのだ。

レイには、レッドアイのレイといったが、それは嘘だった。

この国で、「レイ」というのは、幸せの花の名前だった。可愛らしいオレンジの花。

似ても似つかないけど、俺にとっての幸せの元となっていたからだった。

そう、確か動き出したはずだったのだが……。  
にっと笑った紅いあいつ。

『お前はお前のもの。だから、この先もそれを忘れるな。お前は、他人に流されすぎる。』

レイ？

『これからは、お前が道を作るんだ。……俺とあいつらが迷惑をかけるが、がんばれよ。お前は、選ばれた人間なのだから。』

『さあ、試練はこれからなんだ。これは、オレからの贈り物だ。プレゼントこれから、必要になる記憶だ。ものだいぶ、遅れたが、名をもらったお礼だ。』

まるで、花の名前だと知っているような口ぶりではないか。  
まるで、すべてが分かっているような口ぶりではないか？

俺は、やはり、振り回されるばかりじゃないか。  
そんな自分に嘲笑する。  
そんな自分を見て、微笑むあいつ。

『さあ、行け！！我、神の名の元において幸運を祈る！』

## 贈り物（後書き）

はい。

これから、試練になっちゃいました><

まだ、もうちょっとシリアス続くかも・・・？

あと、20人がお気に入り登録してくれてます!!

とってもうれしいです！ありがとうございます!!

これからも、末永く（！？）よろしくお願いいたします〜^^

## 本当の試練？

落ちた意識がまた、浮上してきた。  
なぜか、最近意識を失ってばかりな気がする。

目を開けるとそこには一面の緑があった。澄んだ空。みずみずしい木々。

その景色に見惚れていると、声がした。

「ルシファー！」

遠くに2つの影がみえる。恐らく、スイとソウだろう。  
よかった。今度は、過去とかではなさそうだ。

「どこに行ったのかと思った。」

「・・・勝手にどこかに行っちゃダメだよ。」

「？」

近くに来た2人を見たが、それはスイとソウでは無かった。否、色合いは同じだったが大きさが違う。

2人と17、8歳の青年だった。俺よりも年下だろうが、そんなに年は変わらないだろう。

1人はソウと同じ色合いで、耳にかかる程度の髪だ。それに、けっこう体が大きかった。

もう一人はスイと同じ色合いで、漆黒の長い髪を後ろで三つ網にし  
ており、前髪も長かった。しかし、白い方と比べると体の線は細か

った。

おれが、誰だろうと首をかしげていると

「……どうしたの、ルシファー？」

「どこか、具合でも悪いのか？」

「いや……。あんたらの名前は？」

とりあえず、聞くのが一番だと思ってそれを実行する。すると、2人は不思議そうな顔をした。

「？ 何を言ってるんだ？」

「僕だよ？ スイだよ？」

「？ あの2匹はもっと小さかったはずでは……」

あのとときの2人を思い出して、手を俺の腰くらいの位置で止める。たしか、それ位の身長だった。

「……ああ！！ そういえば、大きくなったのを忘れてたな。」

「……うん。ルシ、これはね、この場所だからこの姿なんだ。」

やっと、いつも通りの呼び方で呼ばれて、不思議とこの2人はあの2匹なんだと納得できた。

「それは、どどういう意味なんだ？」

「この場所は、試練を試す場所だ。けれど、先代の竜がいるところでもある。」

「・・・試練と共に竜が集う場所でもあるから、力が満ちている。普通なら、このくらいの大きさに成長してからここに来るんだけど・・・。」

「ルシには、今、その必要があるから、ここにいるんだ。」

とりあえず、成長した理由はなんとなく分かったが、今から行う試練というのがなにかまったく分からないし、想像もつかない。

「これから、一体何をするんだ？」

「それはね・・・、あ」

「来てしまったな。」

2人が向いた方向に視線を向けると、なにか鳥らしきものが飛んできた。

「おおーーーーーい！！御二人様、そろそろ時間でございますぞ  
~~~~~！！」



本当の試練？（後書き）

とりあえず、大きくしてみたスイ&ソウ。

イケメン（死語）です。

とりあえず、やっと試練です。後、1、2話続くでしょうか？

最近、忙しいのでまた、更新が遅れるかもしれません>><<  
でわでわ。

## 本当の試練？

それは、『鳥らしきもの』ではなく、『鳥』だった。ただ、鳥と違うのは、喋る、ということだろうか。

「探しましたぞ、お二方！某はもう歳だというのに、1代目様も2代目様もみんな某をこき使いなさる……。某は、いつまでがんばればいいことやら……。この間だって、5代目様が……」

日常のグチが絶えないこの鳥は、丸い黒い瞳に曲がつたくちばし、歳のせいなのか乾いてパサパサだが真つ白い羽、話しながらくると細かく動く首を持ち合わせていた。これはまさしく……

「ああ、お前の苦勞は分かったから……。それよりも我らの竜使い（ドラゴンマスター）が見つかった。」

「この方だよ。名は、ルシファーユーリ。これから、試練に向かう。もう、準備は大丈夫だよね。」

「おお！！このお方が竜使い様であらせられるのですな！！某は、ホトホトと申します。もっと、話をしたいのですが、今は時間が圧していますので申し訳ありません。スイ様、準備は大丈夫でございます。さあさ、参りましょうぞ！」

「……梟？」

「よろしく」とか「どこに行く」とか言うことはいつぱいあるのだが、まず口から出てきたのはそんな言葉だった。

「おお、某はまさしく梟でございます。竜様方に仕えて72年目でございまする。」

「……へえ……。よろしく。」

「ホトホト！ルシファーも！そんなことはいいから早く行かないと！時間に間に合わない、それだけで失格なんだから！」

「おお、そうでございます。では、某の背にお乗りくださいませ！」

背に乗る？大きいといっても1Mほどだぞ？ そんな背に男が3人も？

さすがにそれはムリじゃ……。  
と思っていたら。

ホトホトという梟は、急に羽を自分の体を包むように動かした。全身を包んだ瞬間、眩い光が辺りを包む。

その一瞬の光がおさまると、そこに居たのは先ほどの何倍も大きいホトホトの姿があった。

「さあさ、乗ってくださいませ！今回は、急ぎますので落ちませぬように！」

「神殿まで、急いでくれ。ルシファー、どうした？はやく載ってく

れ。」

「……、ああ、すまない。……………ここは、何でもありな世界なんだな……。」

「ん？何か言った？」

「……いや。」

まだまだ、こんなのがいっぱいなのか、と思うルシファーだった。

5分もかからないうちに、「神殿」というところが見えてきた。そこは、なぜか見たことがある建物だった。

「……城？」

「ん？ああ、ここは王宮の城とつくりが一緒になっているんだ。まあ、全部が城とは反対に造られているが。だから、別名『鏡の王城』というんだ。」

「へえ、そうなのか。」

何か見覚えがあると思ったら、王宮か。確かに王宮とは反対だ。右にあるものが左に、左のものが右にある。色も反転している。

その城を越えて、神殿のような場所に降り立った。これは、あちらには無かったものだ。ホトホトの背から降りる。ホトホトは、「ご武運を。」とだけ言って飛び立っていった。降りて向かった先は、神殿の入り口だろろう石の開き戸の前だった。その扉には、竜らしき絵が彫られている。

「ルシファー、ここからは俺等は頼らないで。」

「僕らは、ルシファーの味方だけど、これは試練だから。」

「「竜を信じて、僕（俺）らを疑って。僕（俺）らを信じて、竜を疑って。それは、ルシファー次第だから。」」

「「あなたの信じるほうへうごいて。」」

急に雰囲気が変わる二匹に戸惑っていると、二匹が微笑んで手を引いてくれた。

「「あなたをしんじている（よ）」」

また緊迫した空気が漂い、おれにも緊張を誘う。

『さあ、みんな待っている』

『ルシファー、あなたを迎えるために』

『あなたのための特別な劇<sup>シヨウ</sup>を準備して』

『さあ、trial（試練）の始まりだ』

ゆっくりと石の扉が開く。奥はまっすぐに続く暗い道。まるで、闇の中に誘うように。

本当の試練？（後書き）

お待たせいたしました

お久しぶりでございます><

3ヶ月ぶりぐらいでしょうか・・・（汗　スイマセン・・・TT

私、受験生なもので入試が迫っているのですツツ（泣

でも、勉強の合間に少しずつ更新していくつもりではありません！

ゆっくりではありますが、私の駄文にお付き合いいただければ嬉しいです

久しぶりすぎて、文がおかしいかもしれません（苦笑

また、誤字脱字や感想をいただければうれしいです^^

でわ、また次話で　ミ　長くてスイマセン（泣笑

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6617j/>

---

紅い瞳と竜

2011年2月11日00時55分発行